



こどものメイゲン④／2

わたしの原風景③ スズキコージ／3

うーたん保育園の挑戦——「多様なまま、いる」ということ 久保健太／4

かこさとしさんを偲んで 西巻茅子、福岡伸一／6

新刊紹介 山本悦子／7

祝 第56回高橋五山賞受賞／7

イラスト／館野鴻

どーんとかまえて

いとうみく

「お子さんおいくつになりました？」と聞かれて、「今年22歳になります」と言うと大抵の人は、「もう手がからなくていいですね」とにこやかに言う。22歳。たしかにそういう年齢だ。成人と言われる年になった子どもに対して、口うるさく言ったり、あれこれ世話を焼いている親を見ると、「ほうっておけばいいのに」「言わなきゃそのうちやるよ」等々言いたくなるし、これまでわたしは、ママ友やら知り合いにそんなことを言っていた気がする。が、どうだ。わたしはいまも口うるさい母親で、うっかりすると世話も焼きすぎてしまう。いけないいけないと、じっと我慢してみみる。朝いつまでも起きなくても、夜遅くまでふらふら出歩いている、部屋がゴミ屋敷状態（屋敷ではないが）になっけていても、我慢してみる。が、それで子どもが劇的に変わるはずもなく、相変わらずの毎日が続いていく。結局3日ともたず、口うるさい母親へと振り返る。そもそもわたしは短気でせっかちで、忍耐力など持ち合わせていないのだ。隣の芝生は青く見える、がごとく、まわりにいる同年代の若者たちを見ては、おおっとまぶしく感じている。

妊娠中、わたしはおなかの中にいる子どもに、どうか無事に生まれてきてと願った。そして生まれると元気に育ってほしいと願い、ハイハイをすれば立っちを待ち、立てば1歩を期待する。保育園に入れば、楽しく通ってほしい、お友だちと仲良くできるといいなと、親の願いは果てしなく続き、広がっていく。

親は、子どもに対して欲張りなのだと思う。そしてわが子のことになるとつい視野が狭くもなる。転んだり痛い目にあわないよう、自分が知っている安全な道へと手を引こうとする。そしてその手は無視されたり、振り払われたりする。考えてみれば、わたしも父や母に同じことをしてきた。そして、それでよかったとも思っている。親はあれもこれもと願い、求め、期待するが、その思いの根っこにあるのは、わが子の幸せだ。しかし、幸せはだれかに押し付けられるものでも、決められるものでもない。

そうだ、そうだった。ちょっとくらい痛い目にあったって、遠まわりをしたっていいじゃないか。どーんとかまえてわが子を見守っていこう。そう思いつつ明日の朝、「早く起きろー」と口うるさく言っている自分が目に浮かぶ。

(いとうみく／児童文学作家)

ほまれ・2歳

こどものメイケン 4

■ 砂浜に寄せる波を見て

「ねえ、
ママ。」

海がこっちに来るよ」

はっとする子どもの一言を、シチュエーションを添えて、お寄せください。氏名・住所・電話番号・お子さんのお名前と年齢・お子さんのお名前の掲載の可否を明記のうえ、童心の会(p8)まで。掲載させていただいた方には絵本を1冊プレゼントいたします。

わたしの原風景

3

スズキコージ

画家／絵本画家



一九四八年二月二十八日、静岡県浜松市、魚座生まれ。ローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズと同じ誕生日だ。終戦直後で母の乳が出ないので、父がお百姓のところにヤギの乳をもらいに毎日通い、それをグビグビ飲んで、なんとか育った。僕の一番古い記憶（〇歳頃、夢の中かも？）は、小さな木のタライに気持ち良い湯が張っており、その中ですっかりごきげんにおしっこをしたっけ。

小野口村の小学校へ入学の日、朝早くからハリキッテ出かけ、学校の校門は確か開いていて、しーんとして誰一人居ないので、泣いて家に帰ったっけ。早く学校へ行きすぎたのだった。

体育の時間は全くダメで、なわとびがうまくできなくて、なさけなかった。鉄棒も最悪にダメだったが、両手でぶら下がるだけはぬきんでて、他の生徒は手を離してやめても、僕だけはずっと平気でぶら下がっているの、先生も意味が悪くなったらしく、「すずきはもうよし」と号令をかけて、僕は仕方なく両手を離したっけ。

小学校から帰ると穴掘りにはげんだ。小さな庭のあちこちに、トンネルを掘り、小宇宙を現出し、自分はそれを支配する神となって遊んだ。が、雨が降ると庭がスウズウになるので、親にしかられた。ので、近所の平六山（へいろうさん）に行き、近所の奴等と、自分達が這って通れる位の本格的なトンネルを掘り進み、トンネルの中で屁をこくと、全員が「クセエ、クセエ」とわめいて脱出して、平六池に浮かぶねじれた丸太に飛び乗ったり、二メートル位の高さの崖を皆でソロソロリと一列に歩いて下の田んぼに飛びおり、おしけづいている奴はつきとばした。

ある日、平六さ（西ヶ崎村と小松村の境に、小さなわらぶき小屋を無断で建てて、独居生活をしていた仙人）の縄文住居に忍び込んだ。もし平六さに見つかったら、杖でなぐられるぞ！と思って、ぼくらは胸が高鳴った。ギイと戸を開けると、中央に炉があり、本が数冊と、土器のような碗がごろがっていた。あわててそこを出て、あたふたと近くの小川の橋で、白ヒゲの平六さが、杖を振り回して「小松の奴らあ、マイタッテエ」（訳：小松の奴等、みんなオバカサン）と演説中、僕等は田んぼの中を匍匐前進して聞き入った。

ともに暮らす保育園

神奈川県茅ヶ崎市にある「うーたん保育園」は、ふつうの保育園と少し違っています。そこでは、障がいのある子と障がいのない子が分け隔てなく暮らしているのです。

僕が訪問した日、うーたん保育園では、子どもたちが、一人になったり、群れになったりしながら、それぞれの時間を、思い思いに過ごしていました。保育室の中でのんびりと過ごしている子、園庭でダイナミックに過ごしている子。園長先生がおっしゃるには、その中に、障がいのある子も交じっているらしいのですが、見た限りは、どの子もそうであるのかは分かりません。

うーたん保育園が、障がいのある子を

久保健太

くぼ けんた／1978年生まれ。関東学院大学教育学部子ども発達学科専任講師。

著書に『子どもが道草できるまちづくり』（共著、学芸出版社）

『育ち合いの場づくり論』（共著、ひとなる書房）

『乳幼児教育の真を保育園からとらえ直そう』（全国私立保育園連盟）

『保育のグランドデザインを描く』（編著、ミネルヴァ書房）など。



イラスト／館野鴻

受け入れることができるのには秘密があります。うーたん保育園と同じ建物の中には、児童発達支援センター「うーたん」があるのです。いや、正確に言うと、二つが合体して「うーたん」なのです。児童発達支援センターというのは、障がいのある未就学の子どもが、療育や自立のための支援を受ける施設です。

さらに、同じ建物の中には、重い障がいのある人が医療ケアを受ける施設「おーらい」と、特別養護老人ホーム「ゆるり」があります。「うーたん」「おーらい」「ゆるり」の三つが入る複合支援施設「A・U・N（あうん）」の中で、子ども、障がい者、お年寄りがかかわりあって暮らしています。

例えば「おーらい」には小さな子どもも通ってきていますが、彼らもそれぞれの気分に応じて、うーたんで過ごします。多い子は週に二、三回はうーたんに来て、

うーたん保育園の挑戦 「多様なままだ、いる」ということ

朝から一緒に保育に参加し、お昼ご飯も一緒に食べます。

うーたんの職員も障がいの知識を持っています。というのも、職員会議にはおーらいのナースも参加し、障がいのある子ども一人ひとりについて、必要な支援や注意しなくてはいけない事項を、うーたんの職員に伝えていくのです。

そうして障がいのある子と健常の子が一緒に過ごしていると、健常の子にも変化が生まれてきます。例えば、子どもどうしが手で触れ合って、少し熱いと感じたら「おねつあるんじゃない？」と大人に伝えてくれるそうです。走るのが苦手な障がいの児と鬼ごっこをするときには、ゆっくり走るようにしたり、一緒にいる障がいの児のちょっとした笑顔を敏感に感じ取って、その子が喜びそうな遊びを始めたたり、といったことも起きています。

ラベル以前のかかわり

僕がうーたん保育園を訪れるのは、五回目です。そしてここに来るたびに「人間って何だろう？」というのを考えます。みなさんもそうだと思うのですが、私は子ども時代、学校で「障がい者にや

さしくしよう」「お年寄りにやさしくしよう」と教えられました。しかし、学校でそのように教えられる前に、僕の周りには、僕に優しくしてくれる障がい者やお年寄りがいました。隣に住んでいたおじいちゃんは、縁側でしょっちゅう将棋の相手をしてくれました。近所には、僕たちが遊んでいると嬉しそうに遊びの輪に入ろうとする障がい者のおばちゃんもいました。おじいちゃんもおばちゃんも僕たちに優しくだったので、僕も、彼や彼女に優しくするのは当然のことでした。

でもそれは、彼らが障がい者やお年寄りだったからではありません。当時の僕にしてみれば、優しい彼らが、たまたま「障がい者」「お年寄り」だったというだけです。「障がい者」「お年寄り」というラベルが貼られる前に、僕たちは人間どうしとしてかかわりあっていたのです。

だから、学校で「障がい者にやさしくしよう」「お年寄りにやさしくしよう」と言われるたびに、違和感がありました（もちろん、そうした教育も重要だと思っていますが）。もともと同じ人間であるはずの僕と彼女との間に区別を設けて「障がい者でない人」「障がい者である人」にやさしくしなくてはなりません、と言われていくように感じたのです。

しかし、悲しいことに、うーたん保

園に行くたびに、かつてもっていた隔てのない心が、若干失われているのを感じます。障がいのある子を、まず一人の人間としてみる前に、「障がい者」のラベルを通して見てしまうのです。しばらくその子と過ごしていると、自分の中のラベルは溶けてなくなり、人間どうしでかわれるようになってくるのですが……。

それでも僕の中のラベルが溶けてなくなりやすいのは、障がいのある彼女と過ごした子ども時代があったからです。うーたんの子どもたちは、僕と同じように、いま、ラベルでつき合う前の、人間どうしのかかわり合いをしています。その体験は、いつかどこかで、かならず効いてくるはずです。

他の命とのせめぎあいのなかで

「人間は、自己創出する生命である」。教育研究者の大田堯の言葉です。自分で自分をつくりあげ、自分で自分を変えていく。それが人間だ、ということです。とはいえ、自分一人だけでたらめたら、変えていくのではありません。他の命とのかかわりの中で、自分で自分を統御しながら、自分をつくりあげていくのです。

そこには「自分をつくりあげていく」と「他の命とかわること」のせめぎ合い（葛藤）があります。この葛藤こそが、人間の本質、学習の本当のあり方であると、大田堯やエリック・H・エリックソンは述べました。「自分をつくりあげること」「他の命とかわり合うこと」「そのふたつの間で葛藤すること」それが、人間の人間たるゆえんだというわけです。

うーたん保育園の子どもたちは、障がいのある子もない子も、誰もがこの三つを生きています。そこにある命が多様な分だけ、葛藤も深くなります。そして、葛藤が深い分だけ、それを乗り越えたときの人間的な強さが太くなるのです。

これは教育研究者として私が憧れる「学習」の姿であると同時に、私が目指す「地域」の姿でもあります。学校が「障がいのある人」と「ない人」を分けただで、そのかわり合いを励ますのだとしたら、地域には、ラベルで分けられる前の人間どうしのかかわりがあって欲しい。「あつん」は「分けない」ことに挑戦し、実践しています。多様なものが分けられずに、多様なまま、いる。それは私がかつて学校の外で生きていた地域の姿であり、私が地域に取り戻したい姿と重なるのです。

西巻茅子

かこさとしさんが亡くなられたと耳にした時、（あら……）と思ったが、悲しくはなかった。かこさんはかこさんの絵本の中にいるのである。我が家にはかこさんの絵本が沢山あるのだから、かこさんは我が家にいるのである。我が家のかこさんは、私が育てた2人の子どもが小さい頃に大好きだった本である。

どうして、我が家の子ども達はあんなにかこさんの本が好きだったのだろう。絵本を描き始めて4年目に長男が生まれ、翌年には長女が生まれた。願ってもない機会だと思い、私は毎晩子ども達に絵本を読んでやっていた。彼等が好きな本1冊ずつと、私の好きな本を1冊、寝る前に読んでやっていたのである。子ども等が本棚から持って来る本は、2人とも圧倒的にかこさんの本であった。なぜ彼等はこんなにかこさんの本が好きなのかと、私は自分の絵本づくりのヒントにしたいと疚しい考えを考え続けたけれど、結局子ども達は、かこさんの本を通して、かこさんと遊ぶことが大好きなのだという結論に至るしかなかった。

私は1度だけかこさんにお目に掛かったことがある。その時、あまり話は出来なかったが、「子どもに読んでやって以来ずーとかこさとし研究をやっています」とだけ申し上げただけだけど、かこさんはにこにこなさって「わたしははじめ紙芝居を描いていて、いいかげんだと子ども達はどんどん他所へ行ってしまうから、子どもを逃がさないように一生懸命工夫したのですよ」と、おっしゃった。そうなんだ。技術ではないのだ。と私はその時、自分なりの理解をしたように思う。私も全霊を込めて、子どもに向かって描くしかないのだということ。

（にしまさ かやこ／絵本作家）

「かこさとし からだの本」シリーズより
『わたしのうとあなたのこころ』
「かこさとし かがくの本」シリーズより
『あまいみずからいみず』と歌山静子／絵
紙芝居
『いちにのさっちゃん』（8月1日復刊予定）



か
こ
さ
と
し
の
こ
ろ
を
し
る

かこさとしがすばらしいのは、いつでも子どもの心の動きを的確に捉えていたことである。それはマップラバー（地図好き）的好奇心といってもよい。子どもたちは何かに興味を持つと、出発点から終着点まですべてをたどってみたいくなる。何かを発見すると網羅的に全部を知りたくなる。魅力的なものを見つけると枚挙してコンプリートしたくなる。これがマップラバー的好奇心。虫オタクとして育ち、昆虫標本を一生懸命集めていた私にはこの気持ちがよくわかる。

かこさんの代表作のひとつ『かわ』（福音館書店）がその典型例。川の源流から河口までが正確・公平にトレースされる。ドラマや事件はなににもない。でもこの淡々とした描写がよいのだ。子どもの想像力は勝手に羽ばたくから。

マップラバーの気持ちは平面だけでなく、垂直方向にも広がる。『宇宙』（福音館書店）ではノミのジャンプから始まって、ページをめくるたびに、高さのスケールが大きくなっていく。建物、高層タワー……。逆にミクロの世界への降下もある。ミジンコ、細胞、分子……（『小さな小さなせかい』 偕成社）。時間に沿っても視点は動く。『万里の長城』（福音館書店）は中国数千年の歴史絵巻だ。マップラバーの面目躍如である。

また、脳や骨について教えてくれる「からだの本」シリーズ（童心社）（私が好きなのは『わたしのうとあなたのこころ』『ほねはおれますくだけです』）、法則や原理をわかりやすく語る「かがくの本」シリーズ（童心社）（『あまいみずからいみず』『ひかりとおとのかけくらべ』など）も忘れがたい。こうしてあらためて並べてみると、かこさんのおちゃめな言葉あそびのセンスが光っているのがよくわかる。

かこさんにはたいへん仲良くしていただき、アトリエにお邪魔して見学させていただいたり、一緒に科学の本を作ったりした（『ちっちゃな科学』中公新書ラクレ）。この本の中でかこさんは、こんな風に語っている。

『都会で自然とふれあえない』なんていうのは、観察力がなえた大人のいいわけであって、子どもたちはどこそこの並木の下にはカタバミがあって、こちらにはタンポポがあって、タンポポは西洋タンポポで……というふうに観察を深めることができるのです。だから小自然でいいのです」

私たちは、小さな科学＝スモールサイエンスに興味をもつことや、センス・オブ・ワンダー＝自然の精妙さに対して驚く気持ちこそが子どもの特性だということを日が暮れるまで話した。かこさん、さようなら。ありがとうございます。

（ふくおか しんいち／生物学者）

福岡伸一

BOOK

命をかけた冒険へ



『雨ふる本屋と雨もりの森』

日向理恵子／作
吉田尚令／絵
本体価格 1400円＋税

山本悦子

書きかけのまま忘れられた物語、夢が種となり、雨のしずくで育ち本となる。そんな「雨ふる本屋」シリーズの第4弾。

ルウ子とサラは、1人の男が、図書館の本棚の前でカタツムリに呪文を唱え、消えるのを目撃します。そう、いつもルウ子たちが「雨ふる本屋」に行くときのように。あとを追った2人ですが、途中で見失ってしまいます。でも、どうやらその男は、今、すきまの世界を騒がせている「影の男」のようなのです。「雨ふる本屋」でも「すきまの世界」でも、異変が起きていました。新しく誕生した「王国」が、すきまの世界を飲み込むうとしているらしいのです。それは、「影の男」の仕業ではないか。ルウ子、ブンリルー、ホシ丸は、「影の男」を追います。「影の男」は何者なのか。夢見たのは誰なのか。「王国」の汜濫を止めることはできるのか。

物語の終盤、すべての真実に気づいたルウ子は、自身を顧みず危険に飛び込んでいきます。ルウ子は、こんなにも優しく勇敢な子だったんだと胸が熱くなりました。ホシ丸はいいいます。「本を読むのも書くのも命がけの冒険なんだね」その言葉通り、この物語には作者の命がけの覚悟が感じられました。美しく繊細な表現で彩られた物語なのに、力強くキリリとしています。「雨ふる本屋」史上、最も強く、最も切ない物語です。

(やまもと えつこ／児童文学作家)

祝

第56回高橋五山賞受賞！

だいすき！ かみしばい

その年に刊行された紙芝居のうち、もっとも優れたものに贈られる「高橋五山賞」の第56回（二〇一七年度）に、とよたかずひこさんの『どうさんきかんしゃ ぼっぼっぼっ』（八場面）が選ばれました。

どうさんきかんしゃに乗ってきた動物のお客さんたち。でも一緒に走っていたら、疲れてしまつて……。小さな子どもたちに大人気の作品です。受賞にあたり、作者のとよたかずひこさんにことばをいただきました。



受賞のことば とよたかずひこ

「この絵本は、つかみぐみに使えますねえ」と評されると、作者は一瞬、複雑な思いにかられる。乳幼児向けの絵本にメッセージがあるわけではない。そうと判っているながらも何か戸惑うのである。何も残らない内容なのか、と。それと比較すると紙芝居は真つ向勝負だ。小さな人たちの反応が即、返ってくる。ゾウの鼻を煙突に見立てれば蒸気機関車の出来上がり。ぼっぼっぼっ、お話し会のつかみとして、めんこいお子たちと存分に楽しんでいただきたい。

一般に賞の対象になりにくい幼年分野に目を当ててくださって、ありがとうございます。



『どうさんきかんしゃ ぼっぼっぼっ』

とよたかずひこ／脚本・絵
本体価格 1400円＋税

7月の新刊図書！

おでかけ版 いしかわこうじ しかけえほん

おでかけ版 たまごのえほん

おでかけ版 はなのさくえほん

おでかけ版 みんな とぶよ！

いしかわこうじ／作・絵

本体価格 1000円＋税

たまごから、かわいいあかちゃんうまれるよ！ 三方にひらくページをゆっくりとひらいていくと…。しかけと展開がマッチしたロングセラー絵本が、小さくなって新登場！ 持ちはこびにもピッタリのサイズです。



どーんと やさい

ごろりん たまねぎ

いわさゆうこ／さく

本体価格 1100円＋税



台所にごろりん、いつもいるたまねぎ。芽が出たたまねぎ植えてみたら、はっぱがわしゃわしゃのびてきて、たまねぎぼうずが花つけた！



「母のひろば」へのご意見・ご感想のほか、子育てについて日々思うこと、子どもたちの活動などについて、お便りをお寄せください。送り先は下記、童心の会宛でお願いいたします。

*お便りを誌面で紹介させていただくことがあります。その際には編集部で選んだ絵本を一冊差し上げます。

生後四か月のときに頂きました。この本をきっかけに、おじいちゃん、ひいおばあちゃんとも「いないいないばあ」と遊ぶことができました。ひいおばあちゃんは「いないいないおった」と言葉も交えており、家族みんなで笑顔になりました。

(福岡県 S・I 二九歳)



松谷みよ子 あかちゃんの本
いないいないばあ
松谷みよ子／ぶん 瀬川康男／え
本体価格 700円＋税

読者の声

『どんどこ ももんちゃん』を次女（一歳）へプレゼントで買ったら、長女（五歳）がももんちゃんのファンになりました。最後の裏表紙では「ももんちゃん オムツがぬれて気持ち悪くてお母さんに替えてほしかったんだね！」と言っていてビックリしました。今回の「おんなじおんなじ」は、次女が本屋で見つけました。「んっ！ んっ！」って指さすのです。（略）私もすっかりファンになってしまいました。とよた先生、小さな幸せをありがとうございます。

(千葉県 M・Y 三六歳)



ももんちゃん あそぼう
おんなじおんなじ ももんちゃん
とよたかずひこ／さく・え
本体価格 800円＋税

2018年7月15日発行（毎月刊）
母のひろば 第650号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4187
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●「かこさとし からだの本」シリーズなど多くの絵本だけではなく、童心社にはかこ先生の紙芝居作品も30作以上出版させていただいてきました。童心社がスタートする以前から、初代編集長などと共に紙芝居の研究を深めるなど、大変お世話になってきたそうです。『6がつ 6ちゃん はっぱっぱ』などの素晴らしい紙芝居も是非ご覧になってください。◎

●作家の方々のご子ども時代の記憶の鮮明さにはいつも驚かされます。頼りない私の記憶ですが、母の背と椅子の背の間に挟まって嗅いだ母の匂いはよく覚えています。匂いと記憶の関係には、漱石やプルーストも強い関心を持ち、百合やマドレーヌの匂いが記憶を呼び覚ます作品を書いています。夕立、線香、水風船…。匂いに溢れる夏、子どもはどんな記憶を刻み取ったのでしょうか。▲